



「私がすべてを支配するはずだったのに…！」

最高管理者 最低処分

～大英雄チュ○ルキン伝説～

基本CG7枚 差分448枚



「チュデルキン。

よくぞ私の為に反逆者共を討ち滅ぼしてくれたわ。
褒美として約束通り、

「晩私のこの体を好きにさせてあげましょう」



小生の名はチユデルキン。

この帝国を統治する公理教会、その元老院の元老長を担う男。

小生の使命はこの帝国の支配者にして我が愛しき女神、
最高司祭アドミニストレータ様を御側で補佐し、
その支配体制を盤石のものとする事。

アドミニストレータ様の支配体制は素晴らしいの一言だ。

この世界を管理する「神」と同等のシステム実行権限を有し、
度重なる実験により不老不死の肉体を持っておられる。

個人の実力としてもシステムアクセスにより

修行などするまでもなくあらゆる剣技を使いこなし、

さらにその美しき肉体は全ての金属武器の攻撃を無効化する、

全ての整合騎士の上に立つにふさわしいお方である。

まさにこの世に生きる現人神。

いや、創成の女神ステイシアの化身とさえ呼べるだろう。

そんなお方と、今宵私は、なんと、褥を共にするお許しを賜っている。

先日、恐れ多くもこのセントラルカテドラルを侵した不届きなる二人の侵入者、黒ずくめの少年と金髪の青き少年。

元老長である私の力を持つてしても命を捨てて挑まなくてはならない二人の若き勇者を前に、私は、彼女に懇願したのだ。

無様にも、アドミニストレータ猊下の足元に這いつくばり、土下座をしながら、必死で。

「反逆者共を殲滅いたしました暁には、

猊下と一夜の夢を共にするお許しを……何卒、頂戴致したく……!!」

彼女は頷いた。その時私は無敵と化した。

死闘の末、私は胴体を黒き刃に貫かれても戦い続け、ついに彼らを打倒した。

そうして、私は今ここに立っている。我が敬愛する女神を

この手で抱くところまで上り詰めた。

この、チビで、醜く、卑劣で、愚昧と蔑まれた、

いつだって誰かの顔色を覗う道化でしかなかった、私が、だ。

なんと光栄にして喜ぶべきことだろう。私は歡喜の涙を流し、

自分がここに存在すること、この世に生まれてきたことに感謝した。

しかし

何故なのか、私の胸には、私の心には、何か、楔のようなものが引っ掛かっている。

あの時から、あの、二人の少年剣士を撃ち破ったあの日から、何か……

青薔薇の、棘のような何か。

「チュデルキン。よくぞ私の為に反逆者たちを討ち滅ぼしてくれましたね。約束通り、
「晩私のこの体を好きにさせてあげるわ」
「あああああ……猥下……このチュデルキン、身に余る光栄にございまするう……!!」



「良いのよ……貴方はそれだけの功績を成し遂げたのだから」

「ふん……。相変わらず不細工で気持ちの悪い男。まあいいわ。もはや神に類する私にとってこんな肉体などどうなるうがさしたる問題じゃない。」



「この男は思ったより有能だった。」

「一晩抱かせてやる程度でこの不細工を今後も」

「有効に活用できると思えば安いもの……」

「……やっぱり少し気持ち悪いけど」

「ハアツッ！ハアツッ！これが狛下のこと……アドミニストレータ様の膣内……！
ハア……ッ！射精する……膣内に……膣内に射精しても
よろしいでしょうかアドミニストレータ様あつッ！」

「いちいち断らなくてもいいのよ？
今宵この晩、私は貴方のものなのだから♡
（ふん……。大きさはそこそこだけど、
ねちっこいだけの愛撫に単調な腰使い……
話にならないゴミセックスね……）」



ズッ

ズッ

「はあ……はあ……私の精子が……猯下の膣内に……
ああ……猯下に種付け出来ようとは……
私はこの国一番の幸せ者に他なりませんまい……」

「そうね。もし貴方の子を身籠っていたら
その子に私の後を継がせてもいいわ」
「なんとという慈悲のお心……!!
やはり貴方様は生ける女神に
「ごぞいます……!!」



ドブツ

ドビョウ

「まあ、100%あり得ないけれど、私は自分の肉体の構成コードを自在に操れる。データ容量の最適化を行った際に排卵日の抑制は済んでいるのよ。そうでなくとも、誰がお前みたいな気持ち悪い愚物の子など……」



ド
ブツ

ド
ビ
ン

チクッ

「痛っ……っ？なに？今、

何かが刺さったような……」



「おや？猥下。

如何いたしましたかかな？」

ポタッ……

ポタッ……

「……!!これは……!?体が……動かない……
いや意識が……この……この眠気は……!!」

ウラウラ……



「チュデルキン……
お前……!何を……!!」

ボクッ……

ボクッ……

「ふっふっふ。猥下、カーディナルという者の持っていた短剣を覚えておられますかな？」

「……勿論覚えてるわ……」

刺された者を強制的に深き眠りへと誘い、

カーディナルの神聖術と強制システムコネクトを行う忌々しい短剣……でもあれは青い服の子供があの女を呼び出すために使い、効力を失ったはず……」

「あの戦いの後回収した剣からは確かにカーディナルへの接続術式は失われておりました。」

しかし、それはカーディナルとの接続機能が失われていたというだけのことです、

接続機能それ自体は無事だったのです。

神聖力さえチャージし直せば、

代わりに別のモノ、ベとコネクト先を挿げ替えることなど造作もない」

「な……りそれで私の身体に何かしらの術式を……り!!」

だ……だとしても……私の肉体は金属無効化によって守られて……」

「ええ、ですので、私お得意の

システムコールインテグレーターユニットID001144……」

「……」

「まさか……短剣を……『石化』したの？」

「その通り！さあ、そろそろ意識を保つのも

辛くなってきた所ですか？

遠慮せずにお眠り下さい」

ウラウラ……

「何故……チュデルキン……」

「お前は私に心酔していたはず……」

「欲に溺れて……野心を抱いたという……」

「欲？野心？」

「勘違いされては困りますな……」

「私はね。」

ゲタッ……

ホタッ……



「正義の心に、目覚めたのですよ」

「ば……かな……な……」

ザワザワ……

「なんだなんだ？」「おい、裸の女が往来を歩いているぞー！」

「あれは……最高司祭アドミニストレータ猊下ではないか？」

「あの数年に一度しか姿を見せぬという？」「なぜあのようなお姿に……」

「な……何？これは……一体どういう状況なの！？」
「私は……なんでこんな姿で……街中に……」



「元老長！何事ですか？！その者は一体……
衣服を身に付けていないようですが……」

「ゴ」静粛に……これより最高司祭アドミニストレータを
弾劾裁判にかける！」

「最高司祭様？やはりこちらの女性が

アドミニストレータ様だということですか？！」

「弾劾裁判？」

「その通り。この女、アドミニストレータは最高司祭の職に就きながら
我欲を満たす為公利教会を私物化し、

帝国臣民への数々の不利益を働いた。

今日はその行いを裁を下すものである！」

アドミニストレータよ……己が罪を隠すことなく自白せよ！」

ザワツ……な……なんだって……」

「(は……? 告白……? ば……馬鹿な……
そんなことをする訳が……)」



「はい！私アドミニストレータは、

今まで国の秩序の為と言って民に『禁忌目録』という法の順守を強いてきましたが、『禁忌目録』を作った本当の目的は全て国民が力をつけるのを妨害し、私に逆らう力をつけさせないためです！」

「違反者は危険分子として『シンセサイズの秘儀』で『整合騎士』として

奴隷同然の洗脳を施し、

違反者でなくとも神聖術に秀でた者は

身体的全機能を奪い支配体制を管理するだけの

生ける屍に作り替えてセントラルカセドラルに監禁しました！」



「……は!?何!?!い、今……回が勝手に……」

ザッ……

「な……なんだって!?!」

「『禁忌目録』にそんな目的が!?!」

「整合騎士は神の使いじゃなかったのか!?!」

「じゃあ……『禁忌目録』に違反して連れていかれた

私の娘の恋人は……この女の奴隷に……?」

ザッ……

「生ける屍ってどういうことだよ!俺の親友は
神聖術が認められて家族ごと
セントラルカテドラルで内勤してるって……
あいつらはどうなったんだよ!」



「はい！他にも整合騎士の親類縁者が行方不明になったのも
全て私の仕業です！
近い将来襲い来るダークテリトリーの魔物達に対抗するため、
およそ300人の人間の命を使つて決戦兵器『ソード・ゴーレム』生み出しました！
今後もしゃんじゃん量産し、最終的には国民の半分を殺して
ゴーレムの材料する予定でした！」

「なんだっつて!?!」



「(口が閉じない!」

言いたくないのに全ての真実をいつらに話してしまっ!」

いつ一体私の体に何が…!!」

ザッ



「自分の意志で身体が動きませんか?」

そっでしよう。実はあなたが眠っている間に

貴女の身体にちよつとした細工を

させていたいただきました」

ザッ



「細工……?」

「『シンセサイズの法』ですよ！」

「貴女の身体を我々の言うこと全てに従い思い通りに動く人形に作り替えたのです」

「ば……馬鹿な！眠っていたとはいえ私の身体にかけられたプロテクトはカーディナルでさえ解除に何日も要する特別な……」

「ええ、確かに私一人の神聖術では無理でした。しかしね。

「セントラルカテドラルには貴女に恨みを持つ強力な神聖術師達が何十、何百と存在するのですよ」

「まさか……生ける屍と化した元老院を目覚めさせて……?」

「あいつが……死んだ!?!」

「国民の半分をゴーレムだなんて……狂ってる!」

「そう!」この者の狂った計画によって帝国全ての民、
そして我々公利教会も騙され、
大切な者を奪われたのです!」

「な、何を言ってるの!?!」

チュデルキン! お前だって共犯……!」

「むぐりー！」

「この悪魔！」「殺せ！殺せ！」
ザッ……

「おお皆様のお怒りも「もつとも」

しかしどうでしょう。

この人類史上最悪の厄災を齎した悪の権化を、

果たして一思いに殺してしまっただけよろしいのでしょうか！

ザッ……





「この者の力の大半は既に我々の手によって失われました！
しかしその命は未だ強固なプロテクトに阻まれ
侵すことは出来ていないのです！
であれば、殺すことより、

我々の憎しみと死んでいった者達の無念を込めて
この悪魔に正義の鉄槌を下すことこそ
我らが使命ではないでしょうか！」

「おお！その通りだ！」

「この世に生まれてきたことを後悔するまで
苦しみを与えるべきだ！」

「く……！言わせておけば好き放題……」

しかし良いことを聞いたわ……フラクトライト依存ではない
身体データである天命や常時スキルの解除は
まだ行われておらず、私は未だ不老不死にして無敵の肉体を持っている……。」

「(「これならどんな拷問にだって耐えられる……」

隙を見て脱出することも容易というもの……)」



「ではまず、この悪魔に女として最低の屈辱を与える為に、市民の皆様はこの淫らな肉体を存分に翫り尽すことを許しましょう！」

リフレイン

ウキウキ♡

いちゃ♡

「くっ……！」

「おおー！やっつてやるぜー！」

「俺もだ」「喰らえこのクソ女！」



ズボオツ！ブチユツ！

「んっっー！ぐっっー！ぶっっー！ぐっっー！」

ズボッ

ズボッ

ぐんぐん

「オラ！俺のも啜えろ！
歯あ立てたらブン殴るからな！」



ガッパッパッ
ガッパッ

ガッパッ
ガッパッ

ガッパッ
ガッパッ

ガッパッ
ガッパッ

「ふん。今のうちに好きなだけ
調子に乗るが良いわ。」

力を取り戻したらお前ら全員

ソードゴーストの材料に……」



「……?」

ポツポツポツ

ヤッ

カカカ

ガクガク

ガクガク

アッ

「おい、この淫売自分から

腰を振ってないか?」

「本当だな。知らない男たちに

無理やり輪姦されて感じるとは、

とんでもないビッチだな」

「(っ)……しまった……」

「(っ)……これはまさか……」





「(そう、確かに貴方の肉体。プロテクトは完璧です。

それは一朝一夕で解除できる代物ではない。

ただし、それはあくまで戦闘やそれが発生する痛みに関係する情報のみ
強欲な貴女が純粹な触覚、それも快樂に関する情報まで
自ら放棄することはあり得ない……

それは普段から衣服との接触情報を避ける為に衣服を身に纏わず
生活していることから明らか……

であれば、肉体の快樂指数をいじることなどと造作もない)」

「金属の剣を通さない無敵の身体も、男達の肉の剣の前では

屈服せざる負えないという事となのです」

グズグズ

グズグズ

「(そ……そんな馬鹿な……

この世界を司る

神にさえ近づいた私が……

こんな一般ヒューマン

オブジェクト共に……

イ、イカされるなんて……)」

グズグズ

グズグズ

グズグズ

「はあっ……はあっ……

そろそろ射精すぞ！」

「俺の子を孕んでてめえの

身体で罪を償いやがれ！」



「オホッ」

「オホッ」

オホッ

オホッ

オホッ

オホッ

オホッ

オホッ

「はあ……はあ……あ……わ……私、私イっちゃ……」

ハーツ

おっ

ハーツ

「おい何に休んでんだ！」

「この程度で終わったと思うなよ！」

「この町の男全員の

金玉が空になるまで

犯し尽してやるからな！」

「ひっ！」

ニ
フギッ

ドクッ……



「ま……不味い……拷問は耐えられてもこの快樂の波を絶え間なく与えられたら……
情報処理が追い付かなくて精神を削られ勝機が保てなくなる……」

「……や……やめ……」

「ハイ……」

「ハイ……」

「オラ！次は俺だ！」

「俺も犯るぞ！」

「この悪魔に

思い知らせてやる！」

「うひいっ！」

「ズンズン」

「ムキムキ」

「ポタ……ポタ……」

「ああ我が愛すべき猊下……
複数の男に蹂躪された
そのお姿もお美しい……」

「はあーっ……はあーっ……」

ふー射精した射精した。これで何発目だ？」

ハーンッ

おっッ

ハーンッ

フズッ

ドクッ……

「さあ？途中から数えてなかったわ」

「耐えた……ようやく……終わった……」

「危なかった……もう少し犯されていたら……」

「お？なんかブズブズ言ってるぞ？」



「安心しろよ。明日も明後日もこれからずうーっと
お前は国中の肉便器だ。」

ハッ

おっ

ハッ

「お前に恨みの有る奴らが

国中から集まって

お前を死ぬまでイカせまくって

くれるだろうよ」

「くっ……下賤な平民風情が……」

必ず……必ずこの屈辱は

数百倍にして返して……」

フッ

ドクン……



「……そこをどきなさい」

「あ？誰に命令してんだ汚物女」

トクーン

トクーン

「……いいから!!」

そこを通して!!

私には行かなきゃ

ならない所が……!!

……?足が……

動かせない……!!」

ズブズブ

ムキムキ

ポタポタ……
ポタポタ……



「アドミニストレータよ。この場から逃れることは許されません。」

お前は大罪人としてこの場で罰を受けるのです」

ヒューン

ヒューン

ズンズン

ポタポタ
ポタポタ

「ま……待って……」

「そっじゃないの……」

「そっじゃないの……」

ムキムキ

「なんだ？」「いつの焦り様……」





「アキムスルー」

グギョルルルル

♡ニハキ

ムンッ

「ふはっ…もしかして「ごんご」

クソが漏れそうなのかよwww」

ヒューッ

ゴブゴブ

「おやおやあ〜？

高貴なる最高司祭様は

平民にケツファックされて

お便所を「所望ですかな〜？」

「ゴゴゴ…どきどきなさい

この低級権限者共！

「ゴ…ごんなこと」が

この私に許されるはずがないわ！

ムチッ♡

ムチッ♡

ポタ…ポタ…



「おっと逃がすかよ。許されないのはお前の罪の方だ」
「この場でクソ漏らして、てめえが今平民以下の
奴隷の立場だってことを思い知りやがれ！」

ハイハイ
おまんこ

ハイ

フググ

ドクク...

「うわああーっ!!」
「離せっ!!」
「はなせえええーっ!!」



「あ……ああ……お、おのれえ……こんな……この私に……
神の席へとアクセスだって出来る偉大な支配者なのに……
よくもお……」

んぐんぐん
ア……ア……

んびん

グ
ビ

ハヤ

「ふん。
いつまで権力者のつもり何だか」
「ケツから糞ぶら下げながら
言っても迫力ないぜ」



「……皆様ご覧になられましたでしょうか。
自分の生理現象二つ管理できない
この醜く無様なケダモノの姿を。」

我々公利教会は裁判の結果、この者、
アドミニストレータを有罪として司祭の座より解任し、
人間に与えられるべき全ての権利、尊厳を剥奪した上で
平民、奴隷、家畜よりさらに下の身分、
『性道化』^{ピエロ}の天職を与えるものとします！！

そしてこの愚か者に代わり、この私、
チユデルキンが新たに
最高司祭代理として皆様を導き、
ダークテリトリの侵攻を食い止めて
御覧に入れましようぞー！！

「おーー」「いっぞーー」「新最高司祭様ばんざーい」

「それでは皆さん、まず手始めに、旧体制への『褻』として、
旧最高司祭……いえ現『便女』にその身をもつて

全国民の怒りを受け止める罰を与えると致しましょうっ！」



ハイッ

おまんこ

ハイッ

ぐわ
ぐわ

「ひっ……や、やめ……来るなあ……！」

「ふん。ど」に逃げても無駄だぜ」

「観念しな。天職として認められた以上、

お前はこれから国中ど」に逃げても

性処理肉オナホとして生きること

になったんだからよ」

「お前の作った禁忌目録の

決まり通りにな」

おまんこ

ドクッ

「フー犯した犯した」

「あーあー汚ねえ。全身体液でべとべとだぜ」

「うあ…あ…」

「それじゃあ今日は
このくらいで
引き上げるとするか」
「そうだな。おい肉便器。
明日からも死ぬまで
犯し尽してやるから
覚悟しろよな」

「公利教会から帝国全土に
お前の悪行を知らしめる
檄文が出てる。
今に国中から
お前に恨みを持つ奴らが
集まってくるぜ」





こうして、一度はこの世界の全てを支配した彼女の、
この世界の全ての者から報復を受ける地獄の日々が幕を開けたのだった。

「おい見ろよ。クソ漏らしのアドミニストレータだぜ」

「なんだあの格好ww」

「ブーツクスクス何あれみつともなーい」

「おい！今日は一体何を見せてくれるんだ？」

ヒンヒン



「う……ぐう……チユデルキン……!!」

「よくも……よくも私にこんな……姿を……」

フククス

ポル

ポル

「見てくださいますいアドミニストレータ元猯下。皆がその衣装を笑っておりますよ。以前貴女が私に着せていた衣装を手直ししたのですが、やはり私より貴方の方がよくお似合いのようだ。ほら、何をしていますのです。早く挨拶をしないと。エンタイアID016。」

ヒンヒン

「や、やめ……」

フラス

ポル

ポル



「通行人の皆様おはようございます！」

この度新最高司祭チユデルキン様より性道化の天職を承りました

アドミニストレータでございます！

これより私のこのいやらしい肉体を用いた変態芸をご覧に入れますので、

私の無様な姿をどうぞ存分に笑いものにしてくださいませ！」



「よっー!」覧あれ!これが元最高司祭
アドミニストレータ渾身のかくし芸、
『おまんこ玉乗り』『ニギギギ』

フッ!♡

ガッ

ガッ

「ぶはっwwwなwwwなんだありやwww」
「逆立ちで玉乗りしながら
自分のマンコを見せつけてやがるwww」
「しかもケツを見るよwww
なんか顔みたくのが描いてあるぜwww」





フツッ♡

ハハ
ハハ
ハハ

『やあーんにちわー!!
僕の名前はおマンコくんだよ!!
よろしくね!!』

『こちらは私の相棒、
『おマンコくん』です!!
さあおマンコくん、
お客様にご挨拶して!!』

グワッ

グワッ

「ちよww何あれwwマン肉パクパク動かして喋ってるわよww」
「自分のまんこで腹話術してんかよww馬鹿じゃねえのww」
「つかおマンコくんて何？マンコなのに男なのか？」
「うわー人間として最低ね。場末の娼婦でもあんな真似しないわよ」

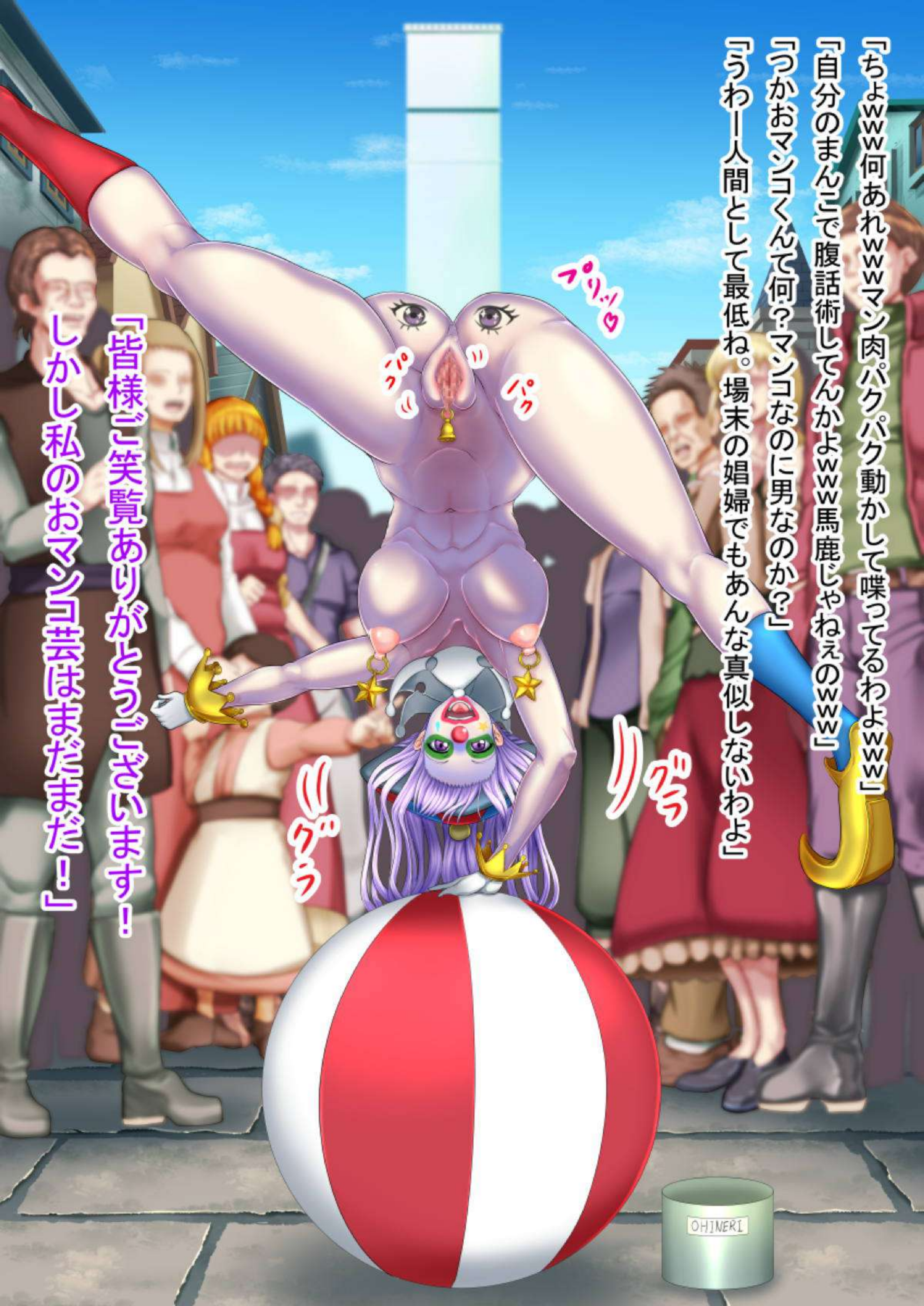
フツッ♡

パンッ
パンッ

カッ
カッ

ゴッ
ゴッ

「皆様」笑覧ありがどういいますー！
しかし私のおマンコはまだまだだー！



OHINERI



「おもしろー!」

「おもしろー!」

「おもしろー!」

「おもしろー!」

「おおっ! その体勢のまま

三回しを始めたぞ!」

OHINERI

「どうですかアドミニストレータのおマンロ様！
お楽しみいただけた方はそちらの皿に
おひねりをお恵みくださいー！」

フウッ♡

ゴッ

グッ

「何あいつ、あんなんで
お金稼ぐつもりなの？」
「生きてて恥ずかしくないのかね」
「羞恥心なんてあったら
あんなことできないうでっよ」



「おやどつやら皆さんまだ物足りないようですね。
よろしい、では私が手伝ってあげましょう」

フツツ♡

ハハ
ハハ
ハハ

「はっはいチユデルキン閣下！
よろしくお願いしますー！」

グワッ

グワッ



「ほい!」「ほぎよおつ!」

「なんだ!?尻に何か突き刺したぞり!」

「今度は何をするんだ?」

「はっ!」

ブ
ス

ハ
ハ
ハ
ハ
ハ
ハ

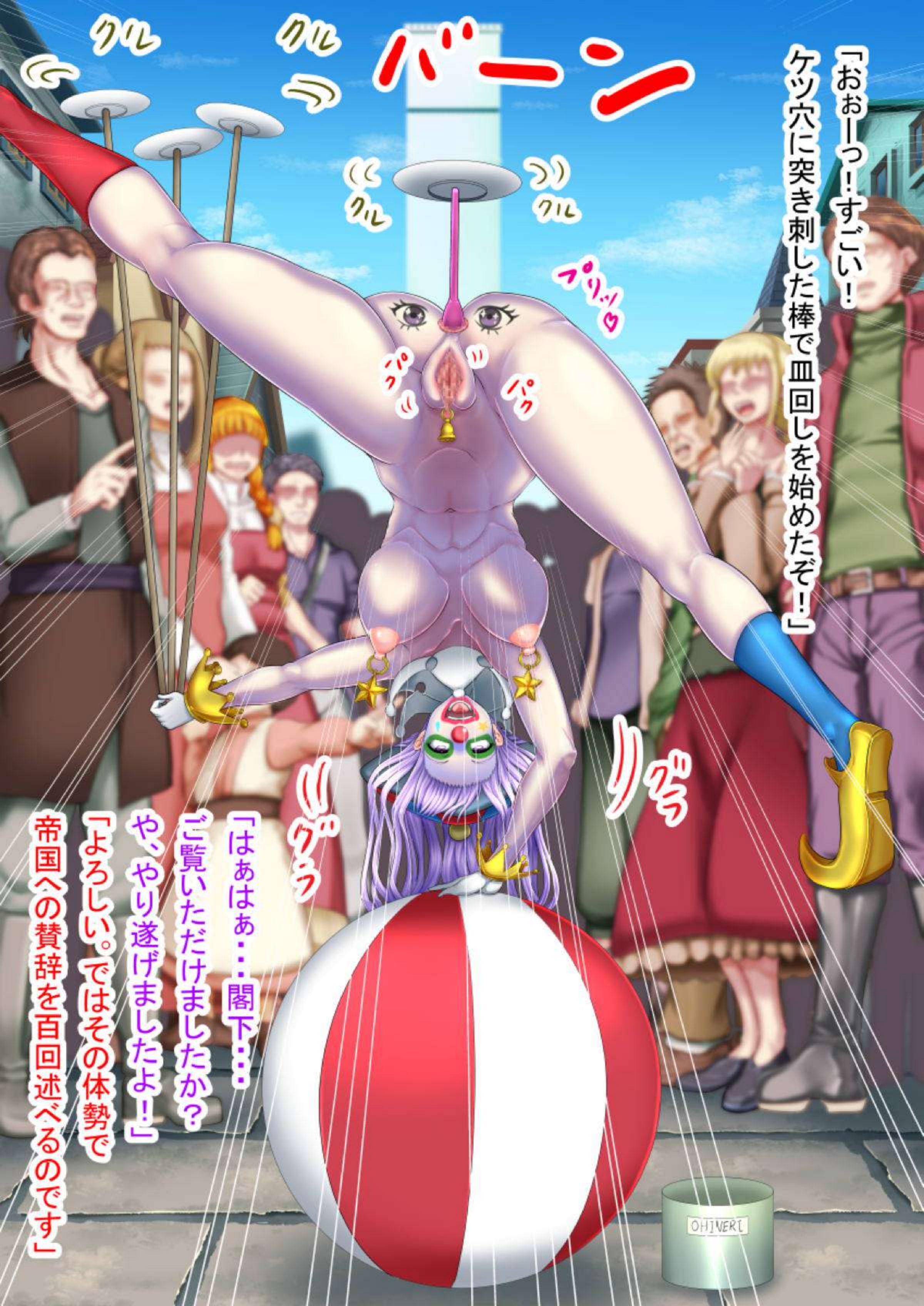
「見事受け止められたら」「喝采!はっ!」

「はっ!」

「はっ!」



「おおーっ！すーい！」
ケツ穴に突き刺した棒で皿回しを始めたぞ！」



「はあはあ……閣下……」
「ご覧いただけましたか？」
「や、やり遂げましたよ！」
「よろしい。ではその体勢で
帝国への賛辞を百回述べるのです」

OHIVERI

「ひっ……. 5回と!」

「無理だといふのですか?」

パツパツ♡

ハハ
ハハ
ハハ

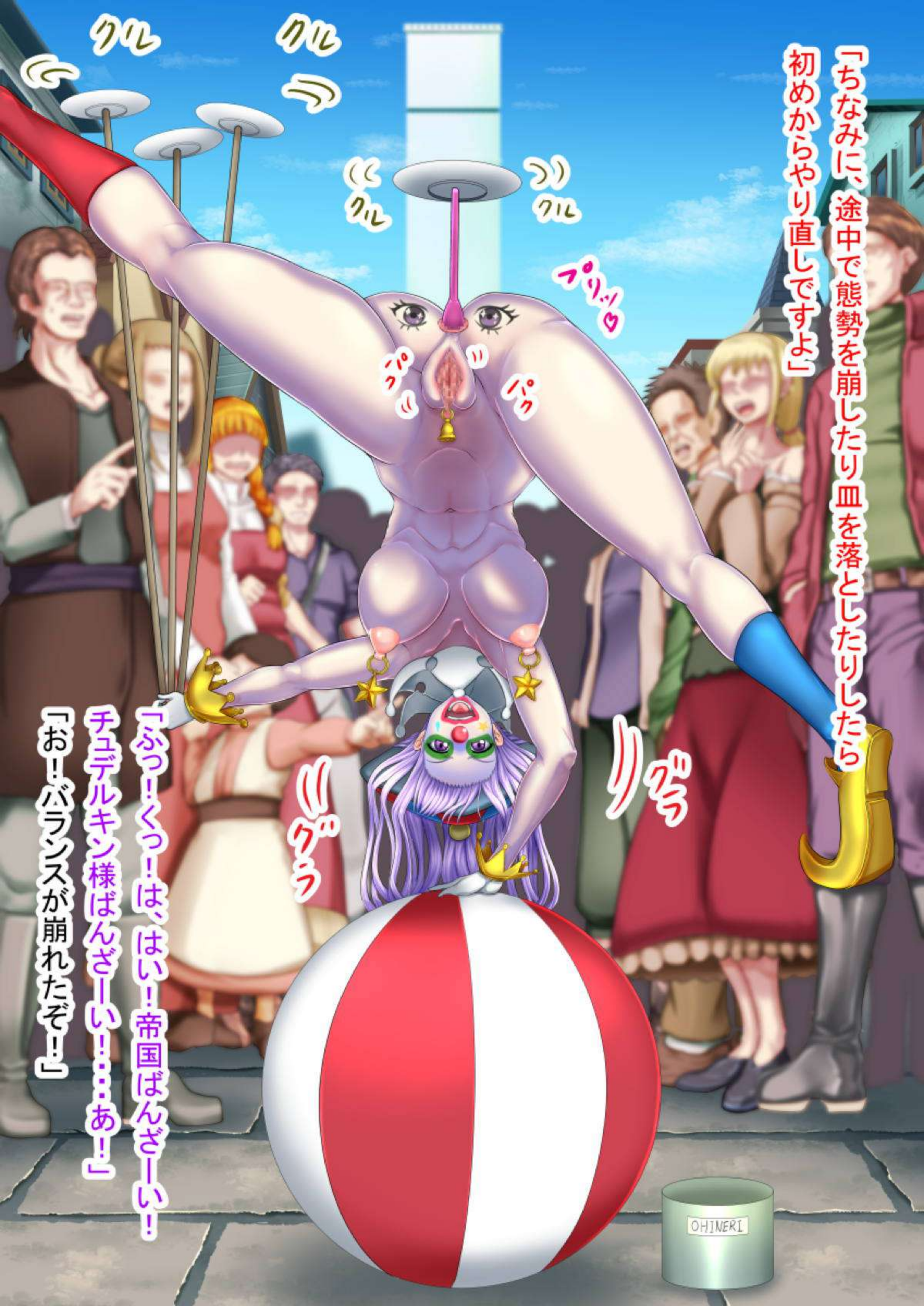
「わ……解りました……で、帝国ばんざーい……
チュデルキン様ばんざーい!」

グハッ

グハッ



「ちなみに、途中で態勢を崩したり皿を落としたりしたら
初めからやり直しですよ」



「お！バランスが崩れたぞ！」
「あー！...あー！...あー！」
「チュデルキン様ばんざーい...あー！」
「ふっ！くっ！は、はい！帝国ばんざーい！」

OHINERI



キュポ♡

「キュポミン〜」
「キュポミン〜」

キュポ♡

キュポ♡

キュポ♡

キュポ♡

「あつー！血墮としたぞー！」

「もう一回最初からやり直しだな」

OHINERI



「そっそんなー……あつー！待って！」

お腹に力を入れてたから……で……出ちゃ……」

パツッ♡

ハハハハハ

グルルルルル

グワッ

グワッ



「ああ……やだ……やらあ……止まっつてえ……嘘よお……」

「このわらひが……こんなの……いやあ……」

フビッ♡

フビッ

ハハ

ハハ

グルグルグル

「一緒に小便も漏らしているぜ」
「本当に動物以下ね。さっさと死ねばいいのよ」

グワッ

グワッ



「ほら、落としたんだから
最初からやり直してしょ。あと百回」

ブビッ

フリッ

フビッ♡

ハハ

ハハ

グルグル

「ひや……ひや……ひや……で……帝国はんぐしやあ……」

クワッ

クワッ



ああ……かつては冷たく濡れるアメジストのようだった
猥下の美貌が糞便と汚辱にまみれて見る影もなく……
なんとという素晴らしき眺めなのでしよう……

「……今日は城下町ではないのね……
JJJJは……闘技場?」



「ええ、私も新最高司祭としての公務が忙しいので。
本日より貴女への懲罰は
この者達が執り行うことになったのですよ」



「どうもこんにちわー！修道女見習いのファイゼルでーっす！」
「同じく修道女見習いのリネルです」

「彼女たちは修道女のみならず整合騎士も目指しておりますてな。
本日はあらゆる剣技に精通する貴女に
この娘達の稽古をつけて欲しいのですよ」

「……ふん。何を企んでるのかは知らないけど、
私にこんな子供を預けていいの？」

「いえいえ、預けられるのは貴女の方ですよ元猯下。
彼女達には私が政務に励んでいる間の間の貴女への命令、
懲罰権限を付与しておりますので」

「なるほどね……」

「元最高司祭様、今はそんな姿だけど元はすっごい強いんですよね？」

「例え罪深き者でも自分の足りない技術があれば敬意を払い教えを請う。そのひたむきさこそ真の整合騎士に必要な矜持ですから！」

「ほほほ流石この国の未来を担う少女たち。なんと頼もしい。それでは私は失礼しますのでしっかり修練に励みなさい」

「ばーい！」

「……これはチャンスね……こんなガキ……いつだって縊り殺せる。隙を見てこの二人を始末して脱出……」

いや、片方を人質にして逃げる方が合理的かしら

「じゃ、稽古の準備をしようか。アドミニストレータさま、
剣を構えてください」

「ええ……(木刀か……)これでもいいからの首をへし折るくらいは……)」

「あ、違います構えるのはそういうじゃなくて」

「?」



「お久しぶりです元最高司祭様。」

私達のことを覚えておいででしょうか」

「まあ忘れちゃってるでしょうね！」

自分の不老不死の実験の為に使い捨てた子供たちのことなんて！！」

「お……お前たちは……まさか」

「そう！アンタが治療神聖術の実験台にする為に

殺し合わせた子供達の最後の生き残りよ！」

「チユデルキン様には感謝しなくちゃね。」

私達が殺し合う様を玉座でふんぞり返って見ていた

あのクソババアを、引きずりおろしてこうやって

直接憂さ晴らしすることが出来るんだもの！」

「そうだね。」

「それじゃあ早速やりますか！」

「ちよ……ま、待ちなさい……
こ……こんな体勢で
た、戦えるわけが」

がが

がが

びびり

びびり

ブルブル

がが

がが



「どっつ？ 剣の衝撃を全部直腸で受けた感想は。
木剣だからアンタの金属無効とやらも
発動しないでしょ？」

ハッ

ハッ

「ふがつーはがつー！
あげつー！ぐげつー！
（や、やばい……
このダメージはまずい……
死……死ぬ……！）」

ぐぐ
がら

ぐぐ
がら

ぐぐ
がら



「オラツッ！次は「」っちだ！！」

バキッ！バキッ！

「あははっ！ねえ見てよネル！
このデカケツ、殴る度に
ブルンブルン波打って超面白いわー！」

「本当だね。真っ赤に腫れ上がって
お猿さんみたい。
ねえ早く代わってよゼル。
次は私の番だよ」

「バキッ！」

「バキッ！」

ん

ん

ん

ん

ん

バキッ

バキッ

ん



「あ、逃げた。」
「ひっ！ひいっ！」

タッ

バン

バン

バン

バン

バン

バン

パリッ♡

「ブアーカ

逃がすわけないでしょー！
喰らえ！下段突き！」



「んげむやあーっ…あぐんっ…」

「うわっ…のババア
マジ泣きしてるよ
超ウケるっ！」
「もーゼルばっか
楽しんでっ」

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ニ

ニ

ピッ

ニ



「あつれ〜？天下の最高司祭様がまさかの命乞いですか〜？
みっじめ〜♥あ、今は『元』最高司祭だっけ？あつはつは！」

ががが

「ね。面白いね。私達がそんなの聞くとでも思ってるのかな」

ががが
ががが



「自分は実験体の命乞いを何百と無視して殺してきたくせに」

へーっ

へーっ

どろどろ

ぐわん



「自分だけは助けてもらえるなんて、まさか思っちやいないよね？」

「あ……あ……」

「それじゃあ、始めようか。大丈夫。どの程度やれば
肉体を損傷させず純粹に苦痛を与えられるかは
熟知しているから。貴方の実験のおかげでね」

「覚悟してね。この世界に存在する全ソードスキル二人分、
全部まとめてマンコとケツ穴にたっぷり注ぎ込んで

あげちゃうんだから」

「ひ……や……やめ……」

ガクガク



へー

ぐわ
がら

ひびく

ひびく

ぐわ
がら

城下町

ザワザワ……

「ほら！早くこつち来な！」

「う……う……」

「私昔から犬飼いたかったんですよ。」

「やっぱり雌犬と言ったら四足歩行ですよね」

がががが

プ……♡

フ……

フ……

ホ……♡

プ……♡

ザワザワ



「よおお嬢ちゃん達！今日はチュデルキン様は
おいでにならないのかい？」

「はい。チュデルキン様は公務にお忙しいお方。」

「こんな雌犬の散歩なんて私達で充分ってことだよ」

「ふふふ…馬鹿にして利用し尽くしてきた
平民たちの足元に這いつくばって見上げる景色は
どうですか？元・最高司祭様♥」

がわがわ

プーン♡

フーン

フーン

ポーン

プーン♡

「くっ…かつ身体が…手足が震えて…

力が入らないっ…まさか…この私が…

こんなガキどもに怯えていると…？

そ、そんなはずは…」

ザン



「はいはいもたもたしてるとまたおマンコを木剣で引っ掻き回しちやいますよ?」

「ひっ!!」

「うっわガチびびりじゃんwもしかしてトラウマ植えついちゃった?」
「最初の威勢のいい態度はどこ行ったのかなー?」
「マジ受けるんだけどww」



「くっ……(私はまだ……私はまだ負けていない……!!
こんな奴ら今に皆殺しにして……必ず頂点へと
返り咲いてやるわ……)」

がわがわ

プ……♡

フ……

フ……

ポ……

「でもただ刑場まで連れて行くっていうのも
つまらないよねえ」

「駄目だよゼル。こいつの飼育も私たちの役目なんだから
真面目にやらないと」

「はいはいわかってますよー……ん?」

ザ……



「あ！ねえネル見て見て！あそこ野良犬！」

「本当だ……何か凄い興奮してるね。発情期かな？」

「こっちの雌犬に興奮してるんじゃないの？キヤハハ！」

がががが

プーン♡

プーン♡

フーン

フーン

ポーン

ザンザン
「あ！ねえネル！私良い」と思いついた！
「奇遇だねゼル。私もよ」
「……？」



『こいつをあの野良犬と交尾させてみようよ!』

?!

ピルピル

がわがわ

びびび

がわがわ

がわがわ

「うひーっ！やっやめっ！...やめなさい！
このクツガキ！離せ！はなせえええっ！」

がががが

プーン♡

プーン♡

フーン

フーン

ポーン

「オラ暴れんなっつーの！いい加減学習したら？
こつちがアンタの身体の支配権限持つてる限り
抵抗は無駄なんだよ！」



ズブワッ!!

「あぎやっぴりっー」

ビュッ

ビュッ

「あ!見てネル!入った!野良犬チンポが
雌犬マンコに入ったよ!」

「うわー!...グロテスクだね」



「おのれえつ！殺してやるう！殺してやるわ！
お前ら全員必ずこの屈辱は万倍にして返
してやるからなあ！覚悟してくが良いわ！」

ビュッ

ハマーマ

ハマーマ

かり

ゴッゴッ

「……なんかうるさいね……」

「そっだね。」

「てかそもそも、犬の癖に人間様の言葉喋ってんの、

おかしくない？」

「そっだね、それじゃあ……」



A woman with long, flowing purple hair is crawling on a grey metal floor. She is wearing a red bikini top and has a large, brown, muscular dog head on her back. The dog head is looking down at her. She has a distressed expression, with her mouth open as if shouting or crying. A metal chain is attached to her waist. In the background, the legs and feet of several people are visible, suggesting she is in a public or confined space. The scene is dimly lit, with shadows cast on the floor.

『システムコールインテグレーターユニットID062！
犬の言葉しか喋れなくなっちゃえ！』

「わん！わんわん……！」

ビュッ

ハマー

ハマー

かり

ゴッゴッ

「あははは……こりやいや！
あの偉そうだった最高司祭様が
必死こいて犬の鳴き真似してるよ♪」



「グルルルル……」
「わ……わん!? わん! わわわん!」

ビクッ

ハマーマ

ハマーマ

ビクッ

「お、そろそろ雄犬の方が
射精しそうだよ♪」
「ほら、貴女もちゃんと自分で
腰を振りなさい。
雄にばかりやらせてちゃ駄目ですよ」



「ウォーミング！」

ドボツ！ゴプツ！ゴチツ！ゴチツ！ゴチツ！

「ほっほよっほおーっ！」

ビュッ

ハマッ

ハマッ

カッ

ドボツ
ドボツ
ビュッ

「うわーガチで犬に膣内射精されてるよおー！」

マジ衝撃映像なんだけどww録ってる？ねえこれ録ってる？」

「もちろん。今日の出来事は尻穴に剣を刺して

戦う所からバッチリ録画済みです。

この映像は後程複製され帝国全土に

公開される予定です「さっすがネル♪」

「うあああ……ひやいん……ひやうらん……」

ビュッ

かり

ドブドブ
ドブドブ
ドブドブ

「うわゝこいつ大人の癖に
ガチ泣きしてるよ」

「ダッサWWW」

ゴッゴッ



「ゼル。そろそろ時間です。刑場へ出発しないと」
「おっとそうだった。ほらいつまでも
犬とやってないでとつとと行くよ犬女！」

「わん……!!わうらん……!!」

ビウッ

ハマーッ

かり

ドブッ

ドビュッ

ビュッ

「……あ？何やってんの？うわなにこれ。
犬チンポ太つと過ぎて抜けないじゃん」
「そっいえば何かで読んだことがあります。
犬は交尾の際睾丸ごと雌の膣内へ挿入し、
射精時はなるべく長時間精子を注ぎ込めるように
睾丸が肥大化して栓の役目を果たすと。
確か十分くらいはこのままなんじゃないでしょうか」

「ええ〜マジっ？じゃあどうすんのこれ？
懲罰の時間に間に合わないじゃん」

「それは……このまま連れて行くしか
ないんじゃない？」





「ラララ…やはりあの二人に任せたのは
正解でしたね。
子供の無垢な残酷性というのは時に
大人よりも恐ろしいものだ。
さて、そうしている間に「こちらも
準備を進めるとしましょうか」

数日後……

「はあーっ！はあーっ！」

じりり

プル

プル

プル

「おいアレ……アドミニストレータだよな？」

「ああ、でもあの腹……」「妊娠？」

「まさか。数日前まで普通の身体だったんだぜ？」



「二……これ……これは……まさか……」

「ええ、その通り。貴方の肉体のプロテクト解除が着々と進んでいるという事ですよ。」

「精子の着床はもちろん、体内時計を操作して胎児の成長を早めることさえ可能になった。」

「そ、そんな……それじゃあもう私の命は……」

「ええ……完全に我が掌の上ということになりますな。しかし……安心ください。」

「全てが終わるまで貴方には死なれてもらっては困りますからね。貴女の不老不死や攻撃耐性はそのままにしています」

ボネッ

ザッ……

カタ

カタ



「さて、では本日の余興と行きますでしょうか。
実は私もこれを楽しみにしていたのですよ。」
「い、いや……やめて……初めての出産が
こんなと」ろでなんて……む、無理よお……」
ザッ



「ほう！永く生きておられるのに」
「出産は初めてでしたか！
それは良い」ことを聞きました。」

ザッ

「そ、そうだ！
出産を見物するのはいいから、
せめて、せめて修道院の中で……」

『ハンタイアロマ・ブルID036』



カタ

カタ

オニッ

ザッ

「はいっ！皆様！いつもこの精液便所アドミニストレータを
ご使用いただきありがとうございますー！」

ザッ……



カタ

ハマーッ

カタ

ボネッ

ザッ……

「本日はチュデルキン様に弄っていただいた子宮によって
私が女として最も大切な瞬間を路上で野良犬のように迎える
インスタント路上出産をお楽しみみてくださいー！」

「ふぁー……ふぁー……」

「……ふぁー……」

「ふぁー……」

「ふぁー……」

「ふぁー……」

「ふぁー……」

「うわ……マジで路上で

イキんでるよ……」

「本当に……で産むつもりかよ……」

「やだもう……本当に最低のメス豚ね」



「ンギヤアアアアツオギヤアアアツ！」

「はあーっ！...はあーっ！」

「この肌の色...顔つき...どうやらちゃんと私の精子で受精していたようですね。」

ムムムム

「おめでとうございます」

アドミニストレータ様！

貴女はたった今、醜く卑しい

最低の人間と蔑んでいた私の子を

見事産み落としたのです！」

「(あ...わ、私...本当に

チユデルキンの子を産んじやったのね...

じ、人生初めての出産でこんな男の赤ん坊を...

それも...こんなに大勢の人間に

見世物にされながら...あは...あはははは...」

「おい、笑ってるぜ」

「ぶん。ざまあねえな。すぐに笑えなくしてやるぜ」



「では皆さん長らくお待ちいたしました！これにて余興は終了！！
本日のお務めです！この雌家畜の出産ホカホカふにゃふにゃマンコを、
存分にお楽しみくださいー！」

ムビクッ
ムビクッ
ムビクッ

「よし次は俺だ！」

「いや！俺が孕ませてやるー！」

「誰の子で孕むか賭けをしようぜー！」

「(もうっ……もう好きにすればいいわ……)」

ムビクッ
ムビクッ
ムビクッ

グ

ムビクッ
ムビクッ
ムビクッ



さらに数週間後……

「おやおやお久しぶりですねえ元兎下。

おや？何やらお元気がないようですが大丈夫ですかかな？」



「……毎日毎日朝から晩まで飽きもせず

凌辱され続けければこんな顔にもなるわよ……」

「それはそれは大変でしたねえ」

「ねえチユデルキン……もう……もう止めにしましょーんな」
私達、あんなに上手くやって来ていたじゃない……!」

「私の負けよ……トツプは貴方で良いわ……」

今後の支配体制も全てあなたの意向に沿ったやり方で進める……

貴方が望むならどんなことだってしてあげる……

だから私をもう開放して……!」



「……今やあなたの命は我が手中にある……そんなことをして、小生になんのメリットがありますかな？」

「……取引の材料ならあるわ……私には、いざという時の為にとつておいた神聖術兵器の保管庫、隠し財産、そして何より

この世界の法則を完全掌握するために必要な

エンタィアコマンドの全ての知識がある……!!

いくら貴方が元老院を味方につけているとはいえ、

その情報を手に入れるのは容易ではないはず……!!」

「……そうですねえ。確かに貴方の言う通り、

現在我が国の戦力枯渇とエンタィアコマンドの解読は危急の課題です。」

「なら……!!」

「ですが問題は、貴女が本当に支配欲を抑え、

私の下に着くことに甘んじられるのかということ。です。

率直に言うとう、私には貴女は改心した等ととても信用できない。

長年の側でお仕えしたからこそわかるのです

あなたの言葉の真偽が」

「な……りほ……本当よ！本当に負けを認めたの！」

貴女には勝てないって心から屈服したの！

こんな素晴らしい御方に逆らった私が馬鹿だったんだって！

ねえこの目を見て！私を信じて！」



「ええええ信じておられますとも。貴女が私を貶める気だとね。」

「そ……そんなことないわ！貴女を尊敬し愛してる！」

また二人で全てが思い通りになる楽園を作りましょう！」

お願いです最高司祭チユデルキン様！」

「全てが思い通りになる楽園……ね。非常に魅力的なお話だ。では一つお伺いしましょう。キリトとユーヅオという名前を覚えておいでですか？」



「……えっ……だれ？」

「……連れていけ」

「待って待って！あ！お、思い出したわ！」

あの男よねほらあの整合騎士の……じゃなくて、その親族の……あれ？
違ったかしら？じゃ、じゃあ、実験に使った子供の名前？
それとも貴族の……」



「あ、待って！連れて行かないで！やだ！やめろ！
やめさせなさいチュニデルキンこれは命令です！
いやっ！いやああああつー！」



「アドミニストレータ様…残念ながら、今の私は正義の味方なのですよ」

「ここでは彼らを外に出さないと同時に彼らの力を我らの戦力とする研究を行っておりましてな。」

ただ、貴女が行っていたような方法ではいざダークテリトリーの連中と戦った際にミニオンのコントロールを逆に奪われかねない。

なにせ元はあちらの生き物ですからな」

「そこで考えられたのが、既存のミニオンと人界側の生物を交配させて人界製の特殊なミニオンを生み出すという実験だったのですが……」

「ひ弱こちら側の生物では、ミニオンの狂暴な遺伝子を受け入れることが出来ず壊れてしまう。それどころか、

そもそも激しすぎるミニオンの交尾に体が耐えられず途中で死んでしまう。」

「そこで、貴女が選ばれたというわけです。」

肉体面、神聖術面において圧倒的な強靱さを誇り、

我々の手で自由に肉体コードを弄り回すことが出来る

便利な実験動物として、ね。」

「そんな……!!こんな……こんな化け物とセックスなんて出来るわけがないじゃない!」

「グルルルルル……ハーツ……ハーツ……ハーツ!」

「がわがわ」

「ぷんぷん」

「グルルル」

「あちらさんはまんざらでもないご様子ですぞ?」

ほうら、もうあんなにペニスを勃起させて、

貴女を孕ませたいと息巻いているじゃありませんか」

「ひいっ……!」

「ビキッ」

「ビキッ
ビキッ」



「いやあつー！むりつー！無理よおつー！そんなおつきなの入らないってばあー！」

ガタガタ

プルプル

ブルブル

「やだつー！やめてつー！裂けるつー！裂けちやうつー！無理やり入れようとししないでつー！いやあつー！」

ぐんぐん



「ダダアアアアッ!」

ブチブチブチブチブチッ!

ドゴゴ

ド

ビクビク

ブクブク

ブクブク

「ギヤああああ」

「じぬっ!死ぬう」



ズボオツ!

「ズボオツー!」

ビクビク

ハマハマ

〜

ビクビク

グニョグニョ

ビクビク

ビクビク

「いやはや凄い広がり様ですなあ。
もうこれでは膣肉は元には戻らないのでは
ありますまいか?」



「嘘お……♡なんで私こんなので
イツちやつてるのお……?♡」

「おや、交尾中のフェロモンにあてられたようですな。
もう二体現れましたよ」



ハマー
ハマー

ビクビク

ビクビク

グハッ

ビク
ビク

ビク

「ひっ……も、もういやあ……」「来ないで！
そ、そっつだ！ま、まだ前の奴が使ってるでしょ？」

「ふふふ魔獣にそんな理屈が
理解できる訳ないでしょう。
そもそも言葉が通じない……ん？」
「ふえっ？」

ビクビク

ハマッ

ビクビク

ぐにゅ

ビク

ビク





「今のはまるで二体目が二体目に対し
膾炙を譲ったように見えました……」

ひょっとしてミニオンという魔獣には
我々が思っている以上の社会性があるのかも……」

「ダオオオオオッ！」

ドバツゴボボツ！ブツバアッ！

ドバツゴボボツ！

ドバツゴボボツ！

ドバツゴボボツ！

ドバツゴボボツ！

「……」



ガバア……

「げ……げあ……あ……」

「ほっほっほまるで妊婦ですな。

まあご安心ください。

今回はあくまで貴女の身体がミニヨンの交尾に

耐えきれるかプレリリースでしか

ありませんでしたので、排卵はしません」



「……やあ……もう……いやあ……誰か……誰か助け……」

「ですので、

この後も『彼ら』の精魂が

尽き果てるまで存分に

お楽しみくださいませ」

「グルル……」「グオオ……」「グウウ……」



「ひ……や……ん……来ないで……やだ！もうやだあつ！
出してえつ！……ん……ん……ん……誰かあ！
おかあさまあつ！……おとさまあつ！……助けてつ！
たすけてえつ！……」

ヒュー……
ヒュー……
ヒュー……

ヒュー……

フポ……

フ……

フ……

ド……

フ……



「おやおやどどうしました？貴女らしくもない。

あの気丈で誇り高い騎士の女王は何処に行かれたのやら……」



「……もう……許してください……」

「……おねがいします……許して……」

「ああそついでしたそついでした。本日貴女を呼んだのは
そのことを話す為でした！」



「……んんんん」

「実は私、貴女に飽きちゃったんですよね」

「……え？」

「確かに美人で身体も最高ですが、貴女の美って所詮データ改竄で塗り固めた虚飾の美しさじゃないですか。中身ババアだし」

「なっ……!!」



「今思えば、私が貴女に執着してきたのは、

その圧倒的な権力と能力に裏打ちされた

鋼鉄の自信に満ち溢れたお姿に憧れたからだだったのかもしれないね。

正直今の弱り切った貴女には何も魅力を感じない。

こうなってしまうえばやっぱり若い娘が一番ですよね」

「うぐうっ!!」

「そういう訳で、貴女は今日で私の玩具『性道化』の天職を解かれることになります」



「……そう……どうどう……死ぬのね……私は……」

振り返ってみれば……あっけないものね……人生なんて

でもいざそうなってみると……不思議と気持ちは落ち着いてるわ……

……さあ、はやく処刑しなさい……」

「は？殺すわけないじゃないですか」



「<>」

「じゃ、じゃあ自由に……」

「ぶっひゃっひゃっひゃっ！」

どこまで脳味噌お気楽なんですかアドミニストレータ様！
精液の飲み過ぎで頭が沸いてしまわれたようですね！」



「今までの拷問程度で私が許しても彼らが許すわけないでしょう！」

貴女に命を奪われたソードゴーレムや実験の材料数千人と、

命以外の全てを奪われた元老院の者達が！」

「……さて、では貴女の今後の処遇について、具体的な話をするとうしましょう。貴女にはこれからミニオンの子供を受け入れる為の改造手術を受けていただきます。全身にミニオンのデータを埋め込み、人間と魔獣の合いの子の生き物として永遠を生きるのです」



「や……やだ……そんなの……絶対いや……
……お願いします！助けてください！
チュデルキン様！最高司祭様！お願いします！」

「んんん？？どうしましようかねえ？
確かに貴女の淫らな肉体は魔獣に
してしまっには惜しい気もしま
すが……
しかしそんな頼み方ではねえ……」

「……」



ガバッ!

「おっ!お願い申し上げます!

偉大なる我が神チュデルキン猊下!

ど、どうかおチンポを!

猊下の神聖なるおチンポ様を

お恵みいただけませんか!」

「この馬鹿で不細工で愚かで
淫乱な生きている価値ゼロの
変態ゴミ豚奴隷をどうか!

どうか猊下のシヨンベンと精液を始末するための

便器穴としてお使いいただけませんか!」

どうか!何卒お慈悲を!お慈悲をおっ!



「んっんっ♪こっうしていると思い出しますねえ。
私が貴女を抱かせてもらおう為に
平身低頭お願いした時ことを。
おや？あの時は貴女が私に
土下座をさせたのでしたかな……？」

「そっその時のことは
大変申し訳なく思っております！
偉大なるチュードルキン猊下の足元にも及ばない
ミジンコ女の分際でなんと恐れ多いことを……」



ゲシッ！

「おやっ！」

ゲシッ

ビクッ

ガクガク

ブルブル

ヒクヒク

「ん？こんなところに
丁度いい足ふきマットが
ありますね？
これはしっかり靴を綺麗に
しなくてはなりません」



「うめい」

「んっどっうしました？」

嫌なんですか？

足ふきマシートの役

ビクッ

ガクガク

ブルブル

びびっ

「ひっ...と...とんでもないぢやありません！」

私は猯下の足ふきマシートですっ...!

私のごとき下女に猯下の

足ふきマシトなどごっつ

大役を賜りましたこと

大変光栄に存じ上げます！」

！「はっはっは！良い心がけですよお〜！
では拭き掃除の後は舐め掃除でも
してもらいましょうかね！」

ビクッ

ガクガク

プルプル

びしょ

びしょ

グワッ

「んっ……んっ」



「いやー楽しかった楽しかった！こんなに楽しい気分は
いつぶりでしょうねえ！よろしいでしょう！
貴女の改心を信じ、最高司祭の権限により
なんなら限定的な
自由行動もお認めしますよ！」



「はああ……っ……猊下……猊下あ……!!
寛大なお慈悲をいただきありがとうございます……!!
わたし……これから猊下の為にこの身を捧げて
働かせていただきますう……!!」

ガクガク
ピルピル

ビクッ

びんびん

ガクッ

「この私が改心なんてするわけないじゃない。支配とは私の存在証明にして生きる意味。誰かの支配を甘んじて受けるなどそれは私が私でなくなることを意味する。」

「(とりあえずこの場だけでも心を入れ替えた演技をしてやり過ごす……」

「インタコマンドの切り札が私の手の中にある以上、生きてさえいければ挽回なんていくらでもできるのよ。今に見ているが良いわ。私が力を取り戻した暁には全国民に恐怖と苦痛による支配を与えお前には人界史上誰も経験したことのないような空前絶後の拷問方法を与えた後でじっくり捌り殺ししにしてやる……!!」



「……ただ、最後に一つ簡単なテストをさせてください」
「……え？テスト？」

「あゝそんな怯えなくても大丈夫ですよ
貴女の今の力でも十分にクリアできる課題ですから。
リネル、アレをニコに！」
「ほっ」



「……あ、チユ、チユデルキン様……」

「これは……この赤ん坊って……」

「おやっ？忘れてしまいましたかかな？」

「まああれから少し大きくなりましたからねえ」

「そうですねよ。あの日貴女が

城下町の往来で獣のように産み落とした、

私と貴方の息子です」

「……!!」

「元気に育っていますよ」



「それで、最後のテストというのはですね……
その子を始末して欲しいんですよ。貴女の手で。」

「……は？」

「実際問題なんですよねえ」

現国家元首である私と

旧支配体制の大戦犯である貴女との間に子供がいるなんて
これがもし民に知れ渡ったら、とんでもないスキヤンダルだ。
そういった火種は消しておきたいのです」



「ですので、せっかくなので母親である貴女の手で送って貰えるのであれば、子供としてもまだ幸せなのではないかという、私なりの思いやりですよ」
「……」



「できませんか？」
「……はあーっ……はあーっ……」

「やった……テストなんて言うから
何をやらされるかと思えば……
助かる……こいつをこんなガキ二匹
縊り殺すだけで私はここから
抜け出せる……!」

「……ごめんね……でもママが助かる為だから
しょうがないよね……子供ってそういうものだものね……
私も……そうだったもの……」



この続きは
「BAD_END」
または
「HAPPY__END」
のフォルダへ



バチインツッ!

「ぎゃっ! な...何!? これは...結界!」

「残念ですよアドミニストレータ様。」

「貴女はこのテストに落ちた。」

「...な、なんですって!」

ギョッ

ババ

「このテストは貴女の人としての心を見るためのものだったのです。」

「自己の安全の為に子供をその手にかけてようとした貴女は、もはや人間ではありません」

「ど...どの口が言うか...!! お前!」



「衛兵！王子殺害を企てた反逆者、
アドミニストレータを実験室へ連れていけ！」
「はっ！」



「あっ！うわあっ！やつやめろおっ！離せえ！

ち……畜生チユデルキン！絶対許さない！

一生恨み続けてやるからなあ！

……いや……あそこは嫌！

あそこに戻るのはいやああああ——っつっつ……！」

A woman with long, flowing purple hair is crawling on the back of a large, muscular man. She has a pained or desperate expression on her face, with her mouth open as if shouting or crying. The man is bent over, and his back is to the viewer. In the bottom right corner, a small, bald man with a beard is lying in a woven basket, appearing to be asleep or unconscious. The background is a dark, teal-colored environment with curved lines, possibly a tunnel or a large structure.

…こうして、我が女神アドミニストレータは、
二度と這い上がれない無限の地獄へと落ちていくのです。

数か月後……

「ダークテリトリーの奴らが来たぞおーっ！」

「第二部隊は北門の守備！第二、第三部隊は東門、第四第五部隊は西門！

遊撃部隊はセントラルカテドラルで待機！」

「チュデルキン陛下……駄目です！どうしても南門に送れる兵が足りません……！」

「第六部隊だけであの魔獣の群れを迎え討つのは不可能です！遊撃隊を回してください！」

「敵にはまだいくつもの切り札がある。今戦力を使い切れればどちらにしろジリ貧で負けます」

「では……」

「第六部隊を下がらせなさい！第一部隊と合流して北門を反攻の足掛かりとするのです！」

「そんな！それでは南門がから空きになってしまうではありませんか！」

「心配ご無用！南門には今日の日の為に開発を進めていた新型兵器を出撃させます！」

「おおっ！とうとう完成したのですか！」

「さあおいでなさい！これこそ我が国の技術の粋を結集させて作った究極の決選兵器……！」



「グガアー！」

「おお！敵の魔獣達が
オマンポゴーレムへと
向かっていくぞー！」

「やりなさいオマンポゴーレムー！
おっぱいビームー！」



「げけーっ！」

ドボボボボツ！

ドボボ
えゅん
ボ

ビョッ

キヤハ♡

ビョッ

キヤハ♡

ハザッ

だゅーっ

ゆら 11 ゆら 11

ビョッ
ビョッ
♡

ド
バ

「おおっ！乳房から
毒液を発射して
次々と空飛ぶ魔獣達を
射ち落としていくぞー！」



ハハッ

ビョウ

ドバ

キキキ

キキキ

ハハッ

だーゅー

ゆる

えゅん 「今だ!!」

小便シャワー!!

ウーウーウー...

「なんと!地上のモンスター達が溶けた!あの小便は硫酸で出来ているのか!」



「そー」です！クリトリスウェーブ！」

「きゅきゅきゅきゅーっー！」

マカ〜ンマカ〜ン

マカ〜ン

「なっなんだあり！魔獣達が急に

同士討ちを始めたぞ！」

あのクリトリスに付いたアンテナを

振り回すことで

敵に催眠術をかけているのか！

凄い兵器だ！しっしかし……」



「グオオーツー!!」

「いくら何でも敵が多すぎる! 猊下! 敵のいくらかは
ゴーレムをすり抜け南門接近中! あっ!!」

「グゴゴーツ！」

「きよきよきよおーっ！」

「オ、オマンポゴーレム、

敵につかまりました！

どうやら交尾されているようです！

「このままでは……南門が！」

ビモッ

キ

キヤハ♡

ビラッ

キキヤモ♡

ブンブン

バクズ

「慌ててはなりません！」

オマンポゴーレムの真の力は

ここからなのですから！

まずは……毒マンロー！」

「グゲエーッ！」

ポトッ！

「……あ！敵の魔獣、オマンポゴーレムから
離れて墜落しました！
どうやら死んでいるようです！」
「ミニオン共に散々に使い古された
性病だらけの激臭マンコは
セックスした魔獣を死に誘う！」





「...?オマンポ。ゴ。レム、子宮口を広げました!...これは!?!」

「げげげ...!」
がばあ!

がばあ♡

ハハハッ

ビョウッ

キキキ♡

キヤ♡

だゅんっ

えゅんっ

ゆら

ゆら

ゴロン♡



「ガアアアッ！」
「グアアアッ！」
「ゴアアアッ！」

「ハサッ」
「ビョッ」
「キチャモ♡」
「キヤハ♡」

「だゅんっ」

「えゅんっ」

「クマァー」

「キヤァー」

「キァー」

「オ、オマンポゴーレムが産み落とした
魔獣が…敵を強襲しています！強い！」

「オマンポゴーレムは
身体から特殊なフェロモンを発して
魔獣を引き寄せ、
自らレイプされることで
敵の魔獣の遺伝子を組み込んだ
新たな魔獣を生み出すことが
出来るのです」

「あー！ゴーレムがまた犯されました！
今度はミノタウロス型です！」
「そのミノタウロスも死亡し、
ゴーレムがまた子供を産みました！
今度は牛頭です！すごい！
どんどん戦力が増えていく！勝てる！
これなら勝てるぞ！」

ビモ

キ

キヤハ♡

キキヤモ♡

ゆー
ゆー

ハサッ

だゅんっ

「けけけきやきや

きやああー」



「……アドミニストレータ様。貴女は今まで散々国と民を苦しめ、
利用してきたのです。」

これからは民の為、国の為に存分に戦ってその罪を償ってください。
なあと、貴女に殺された何百人もの民、そして人生を奪われた
元老院の者達の恨みが晴れる頃には、きっとあなたも
元の姿に戻れるでしょう。

「……まあ、それが何百年後になるかはわかりませんがね♪」



百年後。。。帝都。自然公園中央広場

「ママー」ねな「うー？」

「これはね、この国のチュデルキン王朝の礎を作ったとされる偉大なる初代皇帝、チュデルキン二世様の像よ」

チュデルキン二世様



「後ろのはー?」

「これは魔獣・オマンポゴーレムとって、

チュデルキン二世様が家来にした魔獣よ」

「王宮に入り込んで民に悪さを働いていたところを、チュデルキン二世様に退治されて子分にされちゃったのよ」

チュデルキン二世様



「へえー。ふいでも悪い奴なんだねー」

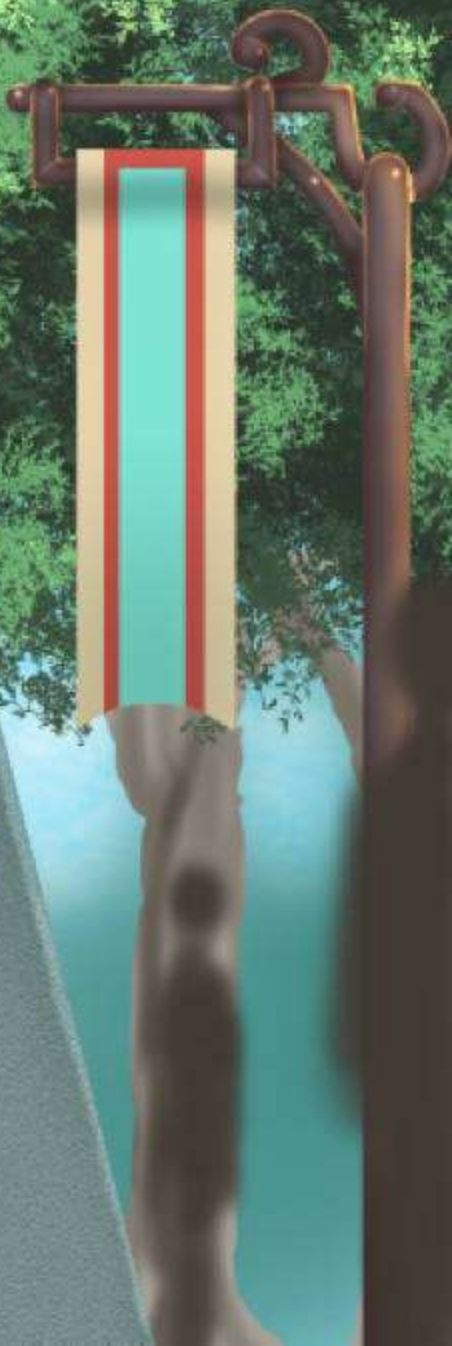
「そっつよ。あなたも良い子にしてないよ」

捕まってオマンポゴレムに

されちゃうんだからね」



おまんぽごれむ
にやまらるる



「ええー！」

「こんな気持ち悪いのやだ〜！」

「ふふふ。」

「じゃあ人参も好き嫌いしないで
ちゃんと食べようね」

「はーい」

「ooo」



さらに数か月後……

「はあ……はあ……おのれ反逆者共め……

我をなんと心得る……

チユデルキン王朝の正統後継者、

チユデルキン七世なるぞ……!」

チユデルキン七世の
即位の詔書

「書物による言い伝えによれば……
この石像には秘密が隠されていると……
確かこの場所で呪文を唱えれば……」





『システムコールインテグレーターユニットID001!!
我が偉大なる祖先チユデルキン二世様!!
そしてその下僕アドミニストレータよ!!
今こそ我にその力をお貸しください!!』



「ア……アア……タスケ……テ……」

「ふう……厳しい戦いであつたが、
何とか国を平定することが出来た……。
この圧倒的な力……そしてこの異様……
流石初代チユデルキンが自著に
『我が国の至宝』と記しただけのこととは
ある……む？」

「おお！なんといいうーとでじょうぶーん、人間の言葉が解るのですか!？」

「ワタシ…クイネラ…ワタシ…ニンゲン…
アナタソ祖先ニ…ゴンナ姿ニ…石ノナカデ…
100ネン…モウイヤ…タスケテ…
タスケテ…」

おっおっ
おっおっ
おっおっ

ポツッ

ハハハハ
ハハハハ

デレレレ

「成程…」

自我を残したまま石像として
石にされていたわけですか。
しかし、貴様がその姿になったのは
数々の悪事を働いた
因果応報と聞きます」



「ワタシ……ワルクナイノ……ゼンブはゆんっ
ダマサレタノ……」

「成程……
全ては初代チユデルキンの
陰謀であつたと?」



「……ソウナノ……ダカラ……
早くワタシヲ……解放シテ……」



「お断りします。
再び石にお帰りください」

「……?」



「わ、ワタシ嘘イッテナイ！お願い！信じて！」

「ああ、その件はもういいです。正直、私には貴女が過去に
どういう罪を犯したかなど興味がありません。

過去の事件の真偽なんて確かめようがないですしね」

「私が興味があるのは現在の貴女だけ。

醜く、淫靡な造形でありながらどこか奪われ尽した

過去の栄華を感じさせるその佇まい……

宝物庫で貴女が人間だった頃の肖像画を見ました。

まさか……あの美女をこのような姿にまで変貌せしめるとは……

初代チユデルキン様のなんとという美的感性！

私など足元にも及ばない！

貴女は今まで生き、支配者となり、敗北し、蹂躪され、封印され、

今日まで生きてきたすべてを含めて二つの生ける芸術品だ！」

「チ……チユデル………!!」

パキパキ……

ハキ

「そのような芸術の有り方を、
私の手で崩してしまおうなどもっての外……」

ハキ

「アツ！アシ！アシガツ！
石ニナツチャウ！イヤアツ！」



「貴女は芸術として末代まで受け継がれるべき
我が家財産です」

シビシビ...

ヒック...はま〜

ハキ

ハキ

「イヤアツ！モウ石ノ中ハイヤアツ！
ヤメテエツ！助ケテ...ツ」



「モ、モウヤダ：：モウ生キタクナイツ：：殺シテツ：：
才願イダカラ私ヲ殺シテクダサイツ！
モウイイ加減死ナセテエツ！」

カミカミ...

モウモウ... あま〜

ハキ

ハキ




「それは、貴女を呪う被害者達に
お頼みください」

とま。。。。

のま。。。。

「ウ……ア……ア……コ……ロ……シ……テ……」





こうしてクイネラ……元最高司祭アドミニストレータにして
現オマンポゴーレムは、チュデルキン王朝の守護魔獣として
その後△00年、彼女が完全に旧式のガラクタと化し
敵国の最新兵器に射ち落とされるその時まで
王族と国を守るために戦い続けたのであった。

しかし、彼女が人間の姿に戻ることは最後まで無かったという。

大英雄チュデルキン伝・愛の章・完

「う……うう……ううう……
な……なんで……なんでよ……
あ……アンタを殺さない……
私……全てが終わっちゃうの……
こんな餓鬼……死のうと生きようと
私にとってはどうでもいい
はずなのに……なんで……」



「なんで殺せないのよお〜〜〜」



「うっ……うっ……チュ、チュデルキン……
最高司祭猊下……」
「……なんですか」

「お願いです……っ
……私は、どうなってもいいです……
どんな罰でも受けます……
家畜の肉便器でも、市民のサンドバックでも、
生体兵器の実験台でも、
なんでもやります……っ!!
だから……どうか……どうか……!!」



「この子だけは、許していただけじゃないでしょうか……!!
この子は何も悪くないんです……!!
私が……私が
馬鹿だったただけなんです……!!
どうか……
この子にだけは……
普通の暮らしを……!!」



「……良いでしょう。私も自分の血を引く子に情がないわけではありません。

貴女に刑罰を上乗せすることと引き換えに、

その子には安全で平穏な暮らしを与えることを

保証しましょう」

「……っ……猥下……ありがとうございます……っ

……ありがとうございます……っ」

「衛兵。連れて行きなさい」

「……っ」

「……きゃん……っ」



「私の赤ちゃん……」

名前も付けてあげられなかったね……

馬鹿なママでゴメンね……」

「……う……う……」

ガシ

ガシ

「ちよつなら……幸せになってね……」



数年後……

ドタドタ

「おいユー・ジオー！早くしろよ！

先に剣の稽古始めちやうぜー！」

「待ってよキリトー！」

「コラッ！あなた達どーに行くの！
今日は朝からママと学校の宿題するって
約束したでしょーっ！」

パン！

パン！

パン！
もーっ！

「うわっ！ママだ！」

「やーだよー！」

宿題なんてするもんかー！」

ぽんっ♡

パンッ♡

ムチ♡

キュ♡

ぽん♡

ぽん♡



「いっ！」と聞かないと

ママ怒っちゃうんだからねっ！

ぴゅっぴゅっ

パン!

パン!

もーっ!

ぴゅっ

ぴゅっ

パン!

ムチっ!

キュっ!

「マ、ママ大変!

またおっぱいが...!」

ぴゅっ

ぽん!

ぴゅっ



「あーっーやーっやだあっー！
興奮したらお乳が漏れちゃった！」

オロ
あっ

あっ

オロ

「俺搾乳機持ってくるよ！」

ユージオはママのシヤ

見ててー！」

「うーっうんー！」

びゅっ

びゅっ

びゅっ

びゅっ

んちゅっ

きゅっ

「おやおや何の騒ぎですか？」

「あーアナタ！んっ」

ほてんっ

んっ

「アナタ♡」

おはよー「ぎゅ」ます♡♡♡♡♡

今日もハンサムねっ♡

だいすきっ♡♡♡

ぴゅっ♡

ぷんぷん♡

ぴんぴん♡

んちん♡

キュっ♡

「おはよう「ぎゅ」います

私の可愛いクイネラさん♡

おやおや？また母乳が

垂れてきてしまいましたか。

大丈夫ですか？」

びゅっ♡

ぽん♡

「うんっ♡今キーくんが搾乳機取りに行ってくれているから平気よ♡
それより、ダイニングに朝ご飯が用意してあるから、冷める前に召しあがって♡

今日もアナタのこと考えながらいっぱい愛情込めて作ったの♡」

アナタ♡

スキ♡

ホメて♡

ホメ♡
だ♡
スキ♡

「ほう。

それは楽しみですねえ。

クイネラさんの手料理は

美味しいですからねえ」

ひゅっ♡

ぽん♡

プリン

ムチ♡

キュ♡



あの「テスト」の後・・・アドミニストレータには罰が下された。

罰の内容は、「自分が虐げた人間の数と同じ数の子供を出産し、
分け隔てなく十分な愛情をもって育てること」。

彼女が虐げた数・・・途方もない数字だが、不死身の肉体を持つ彼女であれば
それは可能ということだ。

あの一件の後、彼女は酷く精神を安定を崩し部分的な記憶の混乱を発症した。
百年の時を君臨した最高支配者アドミニストレータとして悪逆非道の限りを
尽くしていた記憶を持たず、自分を肉体年齢相応の純粋な少女
「クィネラ」だと思い込むようになった。

これは演技だろうか？

しかし彼女は時々夜中に支配者としての記憶を取り戻し、悪夢にうなされるような
そぶりを見せる。

あの支配者の蛮行は純粋なる少女には刺激が強すぎるのか、かなりの
錯乱ぶりを見せるのだ。私も何度もその状態の彼女落ち着かせに行ったことが
あるが、あれが演技だとは思えない。

彼女が私の妻となったのは、それから間もなくのことだった。

いや、「妻になった」というより、「最初から妻だったと思い込んだ」という方が
正しいだろう。自分との間に子供を儲けている男が、自分が辛い時に側で
優しくしてくれるのだ。その男を夫だと思い込んでも、それは無理からぬことだろう。

子供に名前を付けたのは彼女だ。理由はわからないという。

支配者だった頃でさえ記憶はなかったはずだが・・・潜在的な罪の意識が表層に
現れた結果なのだろうか・・・真実は誰にも分らない。

「ごちそうさまでした。それでは仕事に行ってきます」

「あ、待って！」

「アナタ♥️いっしょにきますのチューしてっ」

「はいはい：：全くクイネラは

甘えん坊さんですねえ。チュッ」

えへっ♥️

えへっ♥️

「えへっ♥️えへっ♥️

嬉しいなあ♥️

今日は早く帰ってっねっ」

ぽゅんっ♥️

ぽんっ♥️

んちっ♥️

キゅっ♥️

ぽんっ♥️

ぽんっ♥️



「ほ、本当？早く帰って来てね？あんまり遅くなったらわたし…わたし寂しくて泣いちゃうんだからあつ！」
う…っ…えぐ…っ…」

「あーっ…パパがママを泣かせてるっ…」

「いけないんだー！」

ぽんっ

ぽんっ♡

ぽんっ♡

んん♡

んん♡

「…これは困りましたね！」

「解りました！今日は頑張っ

て残業しないで帰ってきます」



「…ほんとおお？」

「勿論ですよ！それにもうお腹は安定期ですよね？」

帰ってきたら、今夜は久しぶりにいっぱい

愛してあげますから…！…！」

リッぽゅんっ♡

リッぽゅんっ♡

ムチっ♡

キュっ♡

リッぽゅんっ♡

ムチっ♡



「…えっちしてくれるの？わあい♥やったあ♥」
「それじゃあ行ってくるよ。良い子にして待ってるんだよ」

ウキー
ぽんっ♥

えっっ♥

えへへっ♥

ウキー

「はあいアナタ♥」

「♡♡♡♡♡」

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡♡♡

♡♡♡






彼女に踏みにじられた人々の憎しみの呪いは、これからも決して消えることは無いのだろう。

しかし、せめて私の生きている間だけは、彼女に少しでも心の平穏と幸せを与えてやりたい。

その為に私に出来るのは、愛する妻と家族の為に、おのれの正義を信じて戦う、それだけだ。

かつて、私自らが手につけ、私の心を変えてくれた二人の勇者がそうだったように……



その後、チュデルキンの活躍によりダークテリリーとの講和が成り、世界に平和が訪れた。皇帝に即位したチュデルキンはそれより40年後に老衰にて逝去。

王妃クィネラは、さらにその50年後に同じく老衰で死亡するが、その姿は少女のままであったと言われている。

また、その葬儀には彼女の産んだ子供とその親類縁者200名以上が集まり、悲しみの涙を流したという。

そして死後、彼女は人々の間で創成神ステイシアと並び称される安産をつかさどる母神・クィネラとして、人々に長く奉られることとなったのだった。

人界史記 チュデルキン一世の章 完



















































































OHINERI





OHINERI



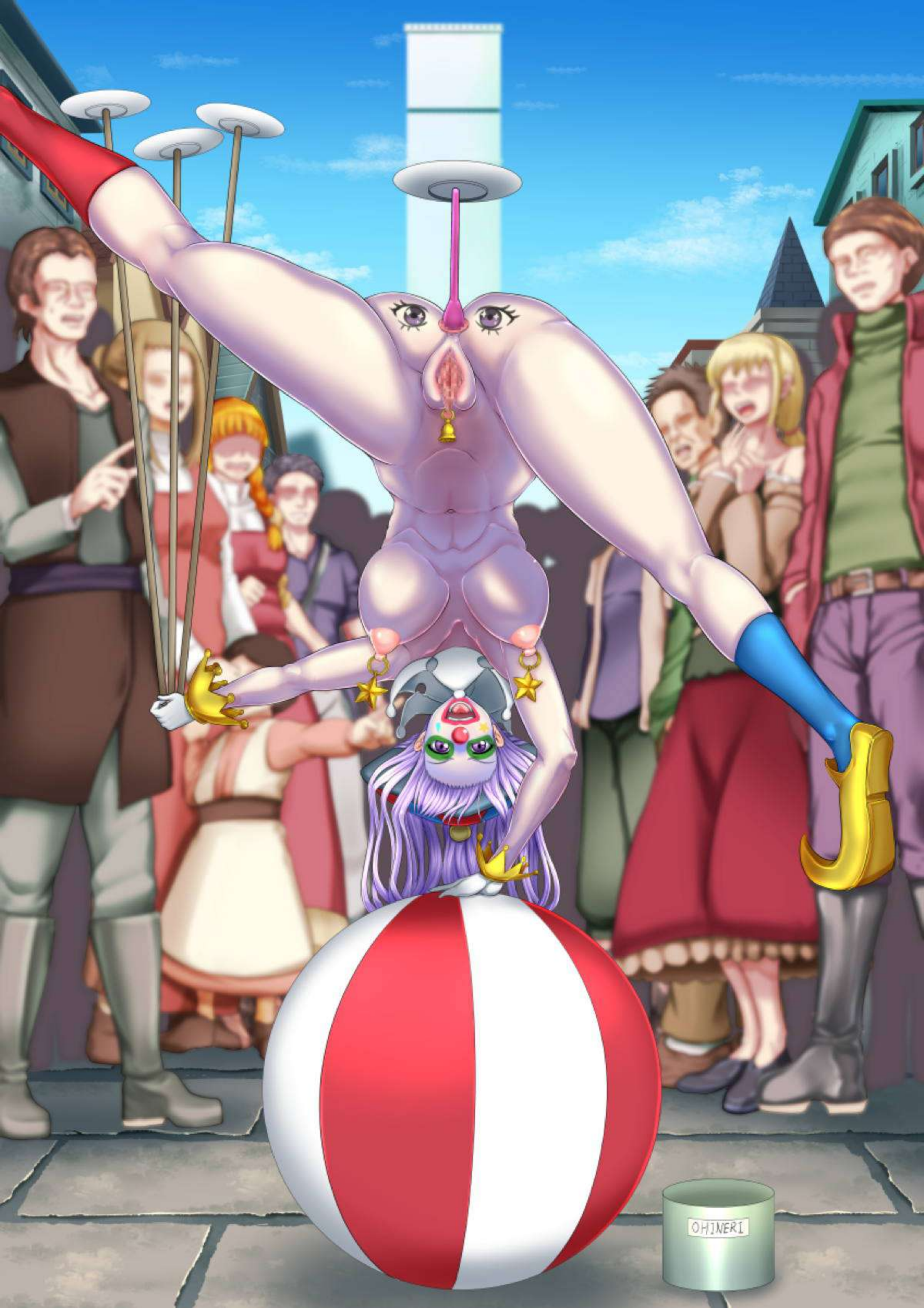












OHINERI



OHINERI



OHINERI





OHINERI











































































































































































































































대한민국
2024년





























충무공 위령탑
충무공 위령탑

































